



# CIVIC FORCE

## NEWS LETTER Vol.13

ニュースレター (November, 2017)



2016年4月の熊本地震により崩落した阿蘇大橋付近。日韓両国の学生たちが訪れた南阿蘇村の高野台では大規模な斜面崩壊が発生し今も甚大な被害の爪跡が残っています



### ■ Contents

#### P2 被災地を支援する

【熊本 × 東北 × 韓国】

・「九州復興支援ボランティアツアー」を開催！

【九州北部豪雨】

・緊急対応から復興へ  
～NPO パートナー協働事業

【熊本地震】

・南阿蘇村にコンテナ設置  
・「NPO パートナー協働事業」進捗報告

#### P7 アジアに展開する

##### 緊急対応体制を創る

・アジアの研修生が日本の災害経験を学ぶ  
・企業 17 社・NPO5 団体と「SEMA」設立

発行日：2017年11月

発行：公益社団法人 Civic Force  
〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷 2-41-12  
富ヶ谷小川ビル 2 階

TEL：03-5790-9366

e-mail：info@civic-force.org

URL：http://www.civic-force.org

## 「今度は自分ができることをしたい」

「あのとき助けてもらったから今度は自分ができることをしたい」

「防災や復興について語り合いたい」

「熊本の被災地の現状を知りたい」

東日本大震災から6年半、熊本地震から1年以上が経ちました。また、世界では今も洪水や地震、台風など多くの災害が人々の生活を襲っています。

Civic Force は、今夏、熊本地震の被災地を訪れる研修プログラム「九州復興支援ボランティアツアー」を企画。東日本大震災で被災した学生と韓国の若者 15 人が、さまざまな思いを持って被災した地域を訪問しました。

地震で変わり果てた故郷を撮り続ける南阿蘇村の写真家や地震の経験を語り継ぐ学生、農業の復興と地域活性化を目指す山都町の起業家たち、歴史ある城下町の街並復活プロジェクトを立ち上げた若者——熱い志を持ったたくさんの人々への取材活動を通じて、災害後の厳しい現状だけでなく、一人一人異なる思いや各土地の魅力を知りました。

今月のニュースレターでは、「国際交流」と「復興支援」がセットになった研修プログラムの報告と参加した学生たちの声をお届けします。また、九州の被災地で実施中の「NPO パートナー協働事業」の進捗状況や、アジア防災人道支援センターの研修生を受け入れて実施した日本研修生についてお伝えします。

# 被災地 を 支援する

日本各地で発生する災害時の緊急支援活動や被災地の復旧・復興に向けた取り組みなどについてお知らせします。

## 熊本 × 東北 × 韓国 「九州復興支援ボランティアツアー」に日韓の学生が参加

2016年4月の地震から1年以上が経ちましたが、熊本では観光客の数が戻らず地域経済に打撃を与えています。そこで Civic Force は8月28日から約1週間、日韓の学生向け研修プログラム「九州復興支援ボランティアツアー」を実施しました。被災地に足を運んで復興の現状を確認しつつ、両国の若者が交流しながら熊本の魅力を体感・発掘。取材の結果を国内外に広く発信し、観光客の増加につなげることを目指しました。

(Civic Force 東日本大震災支援事業「夢を応援プロジェクト」と熊本地震「NPO パートナー協働事業」の連携企画です。韓国で防災ネットワークの構築に取り組む「A-PAD KOREA」と協力しています)

### 「復興」と「観光」テーマに取材

参加したのは東北から7人、韓国から8人の合わせて15人。プログラムの前半、地震の被害にあった熊本市、南阿蘇村、山都町の3地域の被災地を訪問し、復興支援に取り組む地元企業やNPOなどに話を聞きました。そして、それらの情報をもとに後半は3チームに分かれて取材先を決め、各地の復興の現状や観光資源に関する取材活動を実施。最終日には写真を活用しながら聞きたことや今後の発信計画などを発表しました。

### 「1人1万人を熊本に呼び込む」

東北の学生たちにとって今回のプログラムは、被災地としての熊本だけでなく、豊かな自然のなかで地域の魅力を発見する機会になったようです。

また、専修学校の福祉プロジェクトの一環として参加した韓国の学生の目標は「1人1万人の観光客を熊本に呼び込むこと」。帰国後、写真や動画を編集して発信し、年内にはエッセイ集の出版も企画しています。良い作品をつくるため、研修期間中は深夜まで話し合いを重ねる姿がありました。



VOICE

「恩返しの思いで熊本へ来ました」

東北と韓国の若者は熊本で何を学び、何を感じたのでしょうか。  
プログラムに参加した日韓両国の学生に聞きました。



「外国の人と  
一緒に作り上げる  
難しさとおもしろさ」

菊地文一郎さん  
(大学4年)

全日程参加し多くの学びがあり、報道されない熊本の現状や被害の甚大さを知りました。韓国の学生とのグループワークでは進め方や考え方の違いを感じる場面もあり、異なる文化の人たちと1つの物を作り上げる難しさとおもしろさを感じました。物怖じせず考えをぶつけつつ双方の意見を組み合わせる新たな方向性に持っていく大切さを学べたと思います。



「見て、聞いて、  
触れたからこそ  
わかることがある」

岡田楓さん  
(大学4年)

熊本や福岡で出会った人や自然、土地固有のものなど、自分の目で見て聞いて触れたからこそ伝わる魅力がありました。地震後の生活や古くから続く農業など個人旅行では見過ごしてしまうものに溢れていたと思います。地震から時間が経っても復興はまだ途上で発信されない事実があります。そのことをみんなが知っておかなければならないと感じました。



「被災経験を  
語り継ぐ大切さ  
学んだ」

長岡沙羽さん  
(大学3年)

特に印象深かったのは、熊本地震の被害にあった東海大学農学部の学生の話です。仲間の死や事故の後遺症などに直面した同世代のつらい経験を耳にし自らの経験と重なって客観視できませんでした。でも「実体験を語り継ぐことで災害を身近に感じてほしい」と始めた語り部ツアーの話聞き、被災経験を誰かに語り継ぐことの大切さを学びました。



「支援される側でなく  
する側として  
役立ちたい」

村上真聖さん  
(大学3年)

プログラムでは、熊本地震や九州豪雨の災害現場の見学、ボランティア体験を通じて、支援される側から支援する側に立ち、東北以外の被災地に対しても役に立ちたいと感じました。熊本で故郷を大切にしている地元の人と交流したり、韓国の学生と熊本の良い点を考える中で、逆に出身地・岩手に目を向け、故郷を大切にしたいと思うようになりました。



「やっと一歩を  
踏み出せた」

金野綾香さん  
(大学4年)

以前から熊本に行きたいと思っていましたが、なかなか一歩が踏み出せずにいました。思い切ってこのプログラムに参加したことで、被災地の復興について視野が広がる機会となりました。東北と熊本では、同じ被災地でも環境や土地柄で状況が全く違います。今回のような機会があればまた参加したいです。



「恩返しの思いで  
熊本へ」

東晃平さん  
(大学3年)

東日本大震災で被災し多くの方に支援してもらい、その感謝と恩返しの思いで今回のプロジェクトに参加しました。熊本や福岡の被災地はまだまだ復興には程遠い事実を痛感しました。熊本地震から学んだことを東日本大震災の復興のために役立てたいと思っています。

「農業を営む町で  
“地域循環”を  
垣間見て」

キム ミンジュさん



グループワークでは、山都町で農業を営む人の暮らしや考え方をじっくり聞きました。大地の恵からできる農産物、それらを使ったレストラン、まちなかに“循環”があり、ここで耳にしたすべてのストーリーに大きな価値があります。また会いに来たいと思う人たちと出会えました。帰国後、熊本のPRにあたっては観光スポットの紹介ではなく、農業を営む人たちに焦点をあてた動画やエッセイをつくりたいです。

「次の夢は、  
日本への留学」

マ ウォンガンさん



南阿蘇村の観光復興について考えるため、役場の職員や学生、レストランの経営者などに話を聞きました。「震災前を考えると仕方がない。前を向くしかない」という言葉が印象的でした。今回初めて日本に来ましたが、心が純粋な人たちに出会うことができ、もっとたくさん話がしたいと思うようになりました。次なる目標は日本語を勉強して、日本の大学に進学することです。

## 九州北部豪雨の被災地で日韓の学生がボランティア

研修プログラム期間中の8月30日、日韓の学生たちは、今年7月に九州北部豪雨の被害を受けた福岡県朝倉市でボランティア活動を行いました。災害ボランティアセンターと連携する九州キリスト教災害支援センターのコーディネートのもと、他のボランティア参加者約50人と一緒に、壊れた家屋の清掃やがれき撤去、泥出しの作業などに汗を流しました。



「元の生活に  
戻るには  
時間がかかる」

木村朋広さん



夢を応援プロジェクトの夏のプログラムには昨年も参加し、今回が2回目。8日間全日程に参加し一番印象深かったのは、朝倉市でのボランティア活動です。被災地でのボランティアに参加するのは初めてで、1軒片付けるのにたくさんの人出が必要だと知りました。まだまだ元の生活に戻れるようになるのは遠いと感じましたが、これからも何かできることをしたいです。

## 緊急対応から復興へ — NPO パートナー協働事業

2017年7月の九州北部豪雨から4カ月以上が経ちましたが、今も1,200人以上が仮設住宅などでの避難生活を続けています。Civic Forceは、地域の主体的な復興の取り組みを支援する「NPOパートナー協働事業」を通じて、地域の復旧・復興をサポートしています。

NEW

看護師派遣

## 九州キリスト災害支援センター（看護部）



一時28カ所あった福岡県朝倉市の避難所は、11月現在1カ所に集約され閉所へ向けての準備が進んでいます。引っ越しや長引く避難生活にストレスを感じる人が増えるなか、仮設住宅住民や在宅の被災者へのサポートが求められています。

NPOパートナー協働事業では、9月から阪神淡路大震災や東日本大震災、熊本地震などで看護支援経験のある「九州キリスト災害支援センター」看護部の看護師を派遣するプロジェクトを開始しました。災害支援の経験やスキルを、朝倉市行政職員や地元の人材に引き継ぐことで地元主体の支援方法の構築を図ります。

NEW

コミュニティ支援

## ひちくボランティアセンター

大分県日田市の災害ボランティアセンターが9月に閉鎖されたのを受け、民間のネットワーク組織「ひちくボランティアセンター」が立ち上がり、被災者のニーズ調査やボランティアの受け入れ調整などを続けています。「ひちく」とは肥前・肥後・筑前・筑後の総称で、拠点は大鶴地区。Civic Forceは資金提供を通じて同センターの運営をサポートしているほか、事務局機能を補完するスペースとしてトレーラーハウスを貸与しています。

地域住民や来訪者の憩いの場に  
～南阿蘇村にコンテナ設置

竹やぶを整地して設置されたコンテナは大きな窓と景観をそこなわないグリーンが特徴。「みんながふらっと立ち寄れる場所に」と九州学び舎の長野さん



熊本地震の被害を受けた南阿蘇村の復興に取り組む一般社団法人「九州学び舎」に、9月中旬、コンテナ1台を無償貸与しました。韓国企業から提供されたコンテナは20フィート（長さ約6メートル、ISO規格）。地域の人々のコミュニティスペースや南阿蘇村で支援活動に取り組む団体の会議スペース、そして地域の魅力を発信する場所として活用する予定です。

九州学び舎代表の長野良市さんは「地域の人や外から来たボランティアの人が気軽に立ち寄れる場所にしたい。南阿蘇はまだ復興が進まず、人口流出や高齢化、空き地の問題が懸念されるため、土地活用のモデルケースになるよう工夫していきたい」と話しています。

## 誰もが暮らしやすい街を目指して — NPO パートナー協働事業

熊本地震の被害を受けた地域の復旧・復興をサポートする「NPO パートナー協働事業」では、現在 3 件のプロジェクトを実施中。p2-4 で紹介した日韓の学生に向けた研修プログラムのほか、誰もが暮らしやすい街づくりをサポートしています。

### Arts and Sports for Everyone (ASE)

年齢や障がいにかかわらず誰もが参加できるユニバーサルスポーツ「ポッチャ」を通じて、仮設住宅住民の交流促進と孤立化防止を目指す ASE は、仮設住宅などへのポッチャ貸し出しやポッチャ交流会の開催などを続けています。

11 月には、熊本市東部交流センターで開催された「UD スポーツフェスティバル」や、熊本の企業・アイシン九州の社内スポーツ大会などでポッチャ体験会を開催しました。



アイシン九州(株)・社内スポーツ大会でのポッチャ体験会

### 東京 2020 参画プログラム 障がい者スポーツフォーラム & ユニバーサルスポーツ体験会

2020 年のオリンピック・パラリンピックまで、あと 1000 日をきりました。スポーツや文化芸術など 8 つのテーマのもと全国各地で大会を盛り上げるためのさまざまなプログラムが開催されています。ASE 主催の「障がい者スポーツフォーラム & ユニバーサルスポーツ体験会 in くまもと(11/26、熊本県立大学)」も「東京 2020 参画プログラム」に認定されています。

◆詳細は HP 参照

<http://www.civic-force.org/news/news-1849.php>

### 西原村 Reborn ネットワーク

### 大座談会第 2 弾を企画中

地震の被害を受けた村役場や 3 集落の住民グループと協力して地域の再建をサポートする西原村 Reborn ネットワーク。月に 1~4 回、支援団体や住民向けにワークショップを実施しているほか、村内にある交流施設で写真展を開くなど情報発信を続けています。また、8 月に開催した大座談会が好評だったことから、2 回目を企画中。12 月には、新潟で震災後の地域づくりについて学ぶ研修ツアーを予定しています。



地元の魅力を学ぶワークショップ

### LGBT-JAPAN

### 各地での講演に登壇



熊本地震における性的マイノリティ LGBT※の調査や心のケアなどを進める LGBT-JAPAN は、各地で講演活動を行っています。7 月には、NPO の戦略会議にゲストスピーカーとして登壇し避難所運営にあたっての配慮事項などを講義しました。LGBT-JAPAN との協働事業は 9 月で終了しましたが、引き続き災害時のパートナーとして協力していきます。

※LGBT : Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Queer/questioning

# 緊急 即応体制 を創る

大規模災害時の緊急即応体制を整えるためのさまざまな取り組みを行っています。メディア掲載やご協力いただいている皆様の関連情報もお知らせします。

アジア  
に展開

## ASEAN の研修生が 日本の災害経験を学ぶ

アジア地域の災害時緊急対応の調整役を担う「アセアン防災人道支援センター（AHA センター）」の研修生が来日し、10月22日から約10日間、「AHA センター・エグゼクティブ・プログラム（ACEプログラム）」の日本研修を実施しました。

Civic Force とアジアパシフィックアライアンス（A-PAD）が、2014年から毎年受け入れを行っている日本研修は今年で4回目。インドネシアにあるAHA センターで6カ月間の研修を受けたASEAN9カ国各2名の防災行政官らが首都圏の企業・行政の関連施設などを訪れ、日本の災害の経験と日本政府による対ASEAN支援について学びました。

国やセクターを超えた連携支援の意義を知り、相互協力の可能性についても語り合うこの研修を通じて、ASEAN地域の防災リーダーを育てるとともにネットワークの拡大にもつながっています。



緊急即  
応体制

## 企業 17 社・NPO5 団体 緊急対応「SEMA」設立

ヤフー株式会社など災害支援を実施している民間企業 17 社、NPO 5 団体とともに、2017 年 8 月末、国内の緊急災害対応アライアンス「SEMA（Social Emergency Management Alliance）」<sup>シーマ</sup>を設立しました。日本国内で災害が起きたとき、被災地に必要な物資がタイムリーに届く仕組みとして期待されており、さらに多くの企業や NPO の参加を受け付けています。



緊急即  
応体制

## 1 日 33 円から できることがあります

次の大規模災害に向けて平時から備えておくために皆様の力が必要です。マンスリーサポーターとして毎月定額（1,000 円単位）をご寄付いただく形でともに備えてください。また、団体活動全般へのご寄付は以下の口座で受け付けています。

■銀行：三井住友銀行 青山支店 普通 6953964

■ゆうちょ：00140-6-361805

（上記いずれも口座名義は「コウエキシャダンホウジン シビックフォース」

■クレジットカード：HP「オンライン募金」より

[https://bokinchan2.com/civicforce/donation/bokin/page1.php?bokin\\_type=donation](https://bokinchan2.com/civicforce/donation/bokin/page1.php?bokin_type=donation)

※ニュースレターのバックナンバーは、  
<http://civic-force.org/news/monthly/> からご覧いただけます。





**CIVIC FORCE**